

# 巻絹

觀阿弥作

季は	地は	ワキ	官人
冬	紀伊	ツレ (男)	都の持夫
		シテ 神子	

「そもそも是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても我君あらたなる靈夢を蒙り給ひ。千疋の巻絹を三熊野に納め申せとの宣旨に任せ。国々より巻絹を集め候。さる間都より参るべき巻絹遅なはり候。参りて候はゞ神前に納めばやと存じ候。

男次第

「今を始めの旅衣。く。紀の路にいざや急がん。

サシ「都の手振なりとても。旅は心の安かるべきか。殊更は王土の命。重荷をかくる南の国。聞くだに

遠き千里の浜辺。山は苔路のさかしきを。いつかは越えん旅の道。休らふ間もなき心かな。

下歌

「是とても。君の恵みによも洩れじ。

上歌「朝もよい。紀の関越えて遙々と。く。山又山を其処としも。分けつゝ行けば是ぞこの。今ぞ始めて三熊野の。御山に早く着きにけり。く。

男詞

「急ぎ候ふ程に。三熊野に着きて候。先々音無の天神へ参らばやと思ひ候。や。冬梅の匂ひの聞え候。

何くにか候ふらん。實に是なる梅にて候。此梅を見て何となく思ひ連ねて候。南無天満天神。心中の願をかなへて賜はり候へと。

地「神に祈りの言の葉を。心の内に手向けつゝ。急ぎ参りて。先づ君に仕へ申さん。

男詞「いかに案内申し候。都より巻絹を持ちて参りて候。ワキ「何とて遅なはりたるぞ。其為めに日数を定め参る中に。汝一人おろかなる。

地「其身の科は遁れじと。く。やがていましめあらけなき。苦しみを見せて目のあたり。罪の報いを知らせけり。く。

シテ詞「なふく。その下人をば何とていましめ給ふぞ。其者は昨日音無の天神にて。一首の歌をよみ我に手向けし者なれば。納受あれば神心。少し涼しき三熱の。苦しみをまぬかるそれのみか。人倫心なし。其縄解けとこそ。解けや手櫛の乱髪。

地

「解けや手櫛の乱髪の。神は受けずや御注連の縄の。  
引き立て解かんと此手を見れば。心強くも岩代の  
松の。何とか結びし情なや。

ワキ詞  
「是はさて何と申したる御事にて候ふぞ。

シテ詞  
「此者は音無の天神にて。一首の歌をよみ我に手向  
けし者なれば。とく／＼縄を解き給へ。

ワキ  
「是は不思議なる事を承り候ふ物かな。かほど賤し  
き者の歌などよむべき事思ひもよらず。如何様に

も疑はしき神慮かと存じ候ふよ。

シテ  
「猶も神慮を偽りとや。さあらば彼者昨日我に手向  
けし言の葉の。上の句を彼に問ひ給へ。我又下の  
句をばつゞくべし。

ワキ  
「此上はとかく申すに及ばず。如何に汝誠に歌をよ  
みたらば。其上の句を申すべし。

男  
「今は憚り申すに及ばず。彼音無の山陰に。さも美  
しき冬梅の。色異なりしを何となく。心も染みて

かくばかり。音なしにかつ咲きそむる梅の花。

シテ  
「にほはざりせば誰か知るべきと。よみしは疑ひな  
きものを。

地  
「もとより正直捨方便の誓ひ。雲らぬ神心。直なる  
故にかくばかり。納受あれば今は早。疑はせ給は  
で歌人を。ゆるさせ給ふべし。または心中に隠し  
歌も。神の通力と知るなれば。實に疑ひの仇心。  
打ち解け此縄を。疾く免し給へや。

地クリ  
「それ神は人の敬ふによつて威を増し。人は神の加  
護によれり。

シテサシ  
「されば楽しむ世に逢ふ事。是れ又總持の義によれ  
り。

地  
「言葉少なうして理を含み。三難耳絶えて寂念閑定  
の床の上には。眠り遙かに眼を去る。

クセ  
「是によつて。本有の靈光忽ちに照らし。自性の月  
やうやく雲をさまれり。一首を詠ずれば。よろづ

の悪念を遠ざかり。天を得れば清く。地を得れば安しあらかじめ。唯有一実相。唯一金剛とは説かずや。

シテ  
「されば天竺の。

地  
「婆羅門僧正は。行基菩薩の御手を取り。靈山の。釈迦の御許に契りて。真如朽ちせず逢ひ見つと。詠歌あれば御返歌に。伽毘羅衛に。契りし事のかひありて。文珠の御顔を。拝むなりと互に。仏々を顕はすも。和歌の徳にあらずや又。神は出雲八重垣。片そぎの寒き世のためし。言はずとも伝へ聞きつべし。神のしめゆふ糸桜の。風の解けとぞ思はるゝ。

ワキ詞  
「さあらば祝詞を参らせられ候ひて。神を上げ申され候へ。

シテ  
「謹上再拝。そもそも當山は。法性國の巽。金剛山の靈光。此地に飛んで靈地となり。今の大峰是

なり。

地 「されば御嶽は金剛界の曼荼羅。

シテ 「華藏世界。熊野は胎藏界。

地 「密嚴淨土有難や。 (神樂)

地 「不思議や祝詞の神子物狂ひ。不思議や祝詞の神子物狂ひの。さもあらたなる飛行を出だして。神がたりすること恐ろしけれ。

シテ 「証誠殿は阿弥陀如来。

地 「十惡を導き。

シテ 「五逆をあはれむ。

地 「中の御前は。

シテ 「藥師如来。

地 「藥となつて。

シテ 「二世を助く。

地 「一万文珠。

シテ 「三世の覚母たり。

地「十万普賢。

シテ「満山護法。

「数々の神々。彼覗につくもがみの。御幣も乱れて  
空に飛ぶ鳥の。翔りくて地に又踊り。数珠を揉  
み袖を振り。高足下足の舞の手を尽し。是までな  
りや。神は上らせ給ふと云ひ捨つる。声の内より  
狂ひ覚めて。又本性にぞなりにける。